

1位にサツマイモ産地化計画 農業ビジネスプラン最終選考

2月4日、第3回おおさかアグリイノベーショングランプリの最終選考会が、大阪国際交流センター小ホールで開かれ、「大阪さつまいも産地化プロジェクト」を発表した渡邊博文さんが、グランプリに輝き実現資金100万円を手にした。準グランプリは「オーガニック

ハーブのサブスク(※)を提案したNSW(株)西出喜代彦さんが受賞し、実現資金50万円が贈られた。

渡邊さんは令和2年から週末農業をはじめ、研修生を経て3年後に「オオサカポテト」の屋号でサツマイモ農家に。現在は遊休農地を活用して1・5畝の

農地で30㎡のサツマイモ栽培を行い、広告代理店時代の知識を活かし、スーパー、百貨店など販路を広げ、収穫イベントも開催するなどの実績が評価された。西出さんは、平成24年から泉州野菜を使用してピクルスやドレッシングを製造、販売。令和元年からハーブや野菜栽培のために農業に参画し、今回はそのハーブを使った様々な商品開発を毎月定額で販売するモデルを提案したことが評価された。

最終選考会には応募者36人の中から、昨年12月18日に開催された二次選考を通過した6人のファイナリストたちによる農業関連ビジネスプランの公開プレゼンテーションで、この冬一番の寒波にもかかわらず会場は熱心な6人の熱いプレゼンで盛り上がった。(鈴木)



なにわ農業賞受賞者紹介6 安全・安心な野菜を地域の子供たちに

高槻市 高谷 敏宣さん

平成27年に「なにわ農業賞」を受賞した高谷敏宣さん(65)は、現在奥さんと二人で借地も含めて約130坪の農地を活用して、水稲のほか年間20〜30種類の野菜を栽培している。

就農当初から都市近郊農業の強みを活かした経営を目指して、収益性の高い品目を中心に鮮度や品質、安全性にも留意しながら、一時は年間70種類もの品目を栽培していたこともある。

高谷さんは大学卒業後、スーパーマーケットに就職して15年余り勤務。店頭販売や卸売市場での仕入れ業務等の経験を積み、野菜部門のマネージャーなどをしてきたが、農地を相続したことをきっかけに脱サラし、就農した。

当時、流通量の少ない珍しい品目などは調理法を教えて販路を開拓していた。現在、学校給食をはじめJA直売所や庭先での販売のほか、レストラン等飲食店にも納入している。中でも特に人気のあるのがトウモロコシで、朝採りの新鮮なものを畑でのほりを立てて直売すると、



「現状維持は衰退と同じ。これからも毎年新しいことに挑戦したい」と意気込む高谷さん

毎回短時間で完売し、消費者が身近に居るといって都市近郊農業の強みを実感できるそうだ。

時には、趣味のバイクツーリングや奥さんとのドライブを楽しみ、その際も必ず道の駅や農産物直売所に立ち寄り、売られている野菜等の情報収集には余念がないなど常に研究熱心だ。

また、栽培でこだわっているのが土作り。服部緑地公園の乗馬クラブから貰い受けた馬糞に米ぬかを混ぜた自家製の発酵堆肥を施用し、生産物は大阪エコ農産物の認証も受けている。

(光崎)